

ISSN 0454-8302

神奈川歯学

KANAGAWA SHIGAKU



第46卷 抄録集 2011年学会総会
Vol. 46. Abstracts. December 2011

神奈川歯科大学学会雑誌
The Journal of the Kanagawa Odontological Society

CT 画像を併用した歯科解剖学教育と社会貢献 (第1報)

○高橋常男¹、飯村 彰¹、松尾雅斗¹、小口岳史¹、渡辺孝夫¹、土屋真人¹、加藤知弘¹、熊坂さつき²
(¹肉眼・臨床解剖、²駒澤大学)

平成 21 年度、遺体専用の 4 列マルチスライス CT 装置 (Asteion S4) を解剖実習棟内に設置したが、22 年度以来、解剖体の主として固定処置前に全身 CT 撮影を行なっている。学生実習時に解剖前の人体情報と実際の解剖を併用しながら、時に 3 次元構築画像を観ながら人体構造を理解させる試みを始めた。CT 画像所見から解剖手順も先を見越して指導ができること、学生には実習を進めていく上でメス先の向こうの構造をあらかじめイメージできるなどが利点である。解剖前人体情報として脳・脳室、鼻腔・副鼻腔、歯列・顎骨、脊柱の状態、動脈硬化、脂肪量、内臓諸臓器の識別、病態など約 10 項目の情報を提供している。このことは、観察力・洞察力の育成、人体の加齢変化や高学年での X 線画像診断に必要な人体構造を学ぶ意義の動機づけにもなっている。また CT データから脊柱や一部臓器の石膏造形模型を製作し、直感的理解を図っている。しかしながら、CT 画像の読影の修練、死後変化との鑑別、情報量の増加で過重負担、個々の解剖体に対応する画像データを自由に閲覧できるパソコン環境整備など問題点も多々ある。現在までの取り組みを報告する。